愛知教育大学研究報告，48（人文・社会科学編），pp. 77～85, March, 1999

インドにおける映画興行の伝来と映画製作の黎明
——シネマトグラフの世界的浸透（その6）——

永　冶　日出雄

Hideo NAGAYA

（ヨーロッパ文化選修）

I　十九世紀末のボンベイと映画興行の伝来

二度の欧州旅行によって文明社会への懐疑を一層深くしたアメリカの文学者マーク・トウェーンは，1895年7月アジア・オセアニアへの長旅に出発した。バンクーバー，ホノルル，シドニーを経て，翌年1月コロンボから客船ロッセタ丸でボンベイ（ムンバイ）に到着する。長編の紀行『赤道に沿って—世界周遊の旅』で彼は十九世紀末のボンベイをつぎのように描写している。

> ［1896年］1月20日　ボンベイ！眩惑され，撹乱され，魅了される土地。アラビアン・ナイトの再現である。ボンベイは巨大な都市であって，100万の人口を擁する。現地人に少数の白人が混ざるものの，密集した群衆はみな黒ずんで映ずる。冬とは言え，6月の晴朗な天候であって，樹々にも6月の美しい新緑の葉が茂っている。道路を隔ててホテルの向側は美事な並木が連なり，絵のような現地人男女がその木陰で憩う。ターバンを巻いた曲芸師も蛇と秘法を携えて傍らにいる。辻馬車や種々様々な衣装が終日通る。こうした変転する情景，光彩に充ち，たえず推移する眺めには，だれしも見飽きることがないであろう。・・・大きなバザールでは現地人の積み荷と大混雑が私たちを驚かせる。多彩なターバンと衣服の大波が眺める者を感動させる。昔風で派手なインド家屋が格好の背景となっている。夕暮には別の眺望が控えている。海岸沿いに馬車を走らせて，マラバール・ポイントまで行くのである。そこにはボンベイ州知事サンドフルスト卿が住んでいる。道筋の最初にはパルシー教徒の殿堂が連なっている。これを過ぎると，疾走する馬車ばかりである。富裕なイギリス人や身分の高い現地人の自家用の馬車には，ひとりの馭者と3人の従僕が侍っている。従僕は魅力的な東洋風の装いをし，ターバンを巻いたふたりが，塑像のように後方で直立したままである。(1)

喜望峰を回ってヴァスコ・ダ・ガマがカリカットに達した1498年，ボンベイはインド半島辺境の7つの島にすぎなかった。やがてポルトガル人はこれらの島々に要塞を造り，17世紀半ばにイギリスへ譲渡した。ここに1687年東インド会社はアラビア海沿岸の拠点を移し，香料，胡椒，絹，キャラコなどの東西交易を促進した。18世紀にインド全体を従属させたイギリスは，ボンベイに強固な城砦を築くとともに，干拓事業によって島々を陸続きの都市へと開発した。やがてセポイの乱を契機として植民地支配が再編され，ヴィクトリア女王の直接統治が確立するなかで，インドの近代化と産業革命も進展する。1853年ボンベイ＝ターナ間にアジア最初の鉄道が開通し，翌年には当地の商人によって綿紡績工場を建設する株式会社が組織された。(2)

ボンベイのチャーチゲイトで洋品店を営むイギリス人ジョン・ワトソンは，外国人旅行者の激増を眺め，最新式のホテルの建造を着想した。折しも市街の中核にあるエスプラナード（遊歩道）の城壁が取り払われ，彼はその一角を競売で購入した。建築家としての才能をも備えた彼は，鉄筋5階建て130室の堂宇をみずから設計し，造営に要する資材をすべてイギリスから輸入する。1867年に完成したワトソンズ・ホテルは，エスプラナードの丘陵に鳥の嘴のように屹立し，ボンベイ港へ入る船舶には陸標となった。経営の成功によってこのホテルは1880年代に増築され，隣接するヨット・クラブやセイラーズ・ハウスとともに，外国人の交流と憩いの場になっていた。S・ドヴィヴェディとR・メロッタの興味深い市史『ボンベイ』にはこうした由来が豊富な絵図とともに記載されている。(3)

1770年ボンベイに初めてイギリス式の劇場が誕生し，ついで代表的な芸術殿堂，タウン・ホールでオペラ，ミュージカル，演劇が英語で公演された。これらに代って十九世紀の中葉からは民族独自の劇場が設置され，インド演劇の開拓者ランブハウの活躍も始まる。こうしてヒンディ語やマラーティ語で綴られた戯曲がグラント・ロード劇場で演じられ，ボンベイ市民の楽しみや励ましとなった。1880年頃からはマリーン・ドライブ北のグラント・ロードにエルヒンストーン劇場，

ボンベイ劇場，リポン劇場が，フォート地区ヴィクトリア・ターミナル駅の近くにはゲイアティ劇場，ノヴェルティ劇場，アルフレッド劇場が建造される。グジャラーティ語の戯曲を演ずる劇団ダーティ・ダルシャックやパルシー教徒によって結成された劇団ヒンドスタニも，これらの舞台で喝采を浴びた。ただし，音楽，舞踊，演劇に女性を参加させることが，この時期には退廃とみなされ，女役はすべて男性により演じられた。(4)

リュミエール映写技師団のマリウス・セティエが，ボンベイを訪れたのは，1896年の7月初めである。ローヌ川流域のドロームで生まれた彼はリヨンで薬学を修めたのち，リュミエール社の映写技師および受託代理人として，インド・オーストラリア巡業を命じられた。(5)

インドにおけるシネマトグラフ初公開はセスティエによって1896年7月7日ボンベイのワトソンズ・ホテルにおいて行なわれた。グラン・カフェ＝インド広間での興行開始から7ヵ月半後，またニューヨーク＝ブロードウェイへの進出からわずか10日後である。インドの権威ある英字新聞『タイムズ・オブ・インディア』には，リュミエール映画の上映について当日つぎのような広報が掲載される。

世紀の奇蹟，
世界の驚異
リュミエール兄弟により
実物大に再現される迫真の活動写真
シネマトグラフ
ワトソンズ・ホテルにおいて数次公開
今夕（7月7日）
予定のプログラム
1　シネマトグラフの会場入口
2　列車の到着
3　海水浴
4　壁の取り壊し
5　工場の出口
6　自転車に乗る淑女と兵士
上映開始：6時，7時，9時，10時
料　　金：1ルピー (6)

D・B・ガルガによる浩瀚な通史『かくも多くのシネマ—インドにおける映画』にはシネマトグラフ初公開に関する新聞の論評が転載されている。すなわち，同月9日付『ボンベイ・ガゼット』ではリュミエール映画がつぎのように称賛された。

オーストラリアへの途上にあるリュミエールご兄弟［ママ］が真に驚嘆すべき発明を披露してくれた。供せられた作品としては，乗客を満載して駅に到着する列車が，現場さながらの躍動と雑踏を印象づける。『壁の取り壊し』はきわめてリアルであって，最後に壁が傾き，倒壊する際には濛々と砂塵が昇る。『海水浴』も美事な光景を呈し，海浜に打ち寄せる波涛と水浴する少年のおどけた所作が非常にリアルである。しかし，これを凌駕するのは『工場の出口』であって，一斉に退出する群衆全体を画面に収め，きわめてリアルな光景を描出する点で傑出する。『自転車に乗る淑女と兵士』では，ハイド・パークでいつでも見られるサイクリング熱が，まのあたりに再現されている。自国で注目の的となったこの発明，シネマトグラフにみずから接する好機を，科学の進歩に関心を抱く人は，見逃してならない。(7)

ワトソンズ・ホテルでのシネマトグラフ公開は外国人を対象とするものであり，インド人は度外視されていた。中庭，レストラン，売店，撞球場を備えたこの堂宇は，欧米で徴募された幹部社員によって運営されていた。ここでの接待や饗応がいかに白人偏重であったかを，半年前に滞在したトウェーンは『赤道に沿って』のなかで辛辣に語る。

インドはすぐ朝になる。ホテルの朝は早い。ロビーと広間が浅黒い現地人で一杯になる。彼らはターバンを巻いた者，トルコ帽を被った者，刺繍で身を飾る者，肩掛けを付けた者，裸足で歩く者，木綿を纏う者がいる。ある人たちは忙しく走り，ほかの人たちはうずくまるか，地面に座って動かない。活発に談笑する者もおり，夢み心地で喋らない者もいる。食堂では各々の客に専属の給仕が配され，アラビアン・ナイトの一役を演ずる衣装で背後に控えている。

私たちの個室はフロントからはるかに高い位置にあった。私が外から帰ると，ひとりの白人（頑丈なドイツ人）が3人の現地人とともに部屋の点検に行く。これに続いて14人ほどの現地人が手荷物を持って順々に登る。彼らはそれぞれひとつの物品か鞄だけを運ぶ。屈強なひとりは私の外套を，他の各々は傘や煙草入れや小説を受け持つ。最後の男には扇子しか残されていなかった。これらすべてが熱意をもって真剣に行われ，徹頭徹尾ひとつの笑みも見られない。私たちのだれかが1コパーのチップを与えるまで，彼らはみな慌てず，忍耐強く静かに待っている。そして，恭しくお辞儀をし，額に指を当てて去っていく。彼らは柔和で情の深い人種であり，こうした挙止振舞には魅力的で感動的なものが感じられる。(8)

ワトソンズ・ホテルでは日毎に作品の差し替えを行い，1週間の上映計画を終了した。熱烈な讃辞に自信を強めたセスティエは，7月14日から舞台をボンベイ市内のノヴェルティ劇場に移し，興行を続行する。数多の観衆を収容できるこの会場では，華やかな照明が正面玄関を照らし，セント・ジョン教会のオルガン奏者セイムール・ドーヴの指揮によって音楽も奏せられ

る。座席の位置によって料金は2ルピー，1ルピー，8アナー（4分の1ルピー）の3等級に区分され，当地の慣例に従って婦人席がカーテンで仕切られた。ここでの上映回数は1日2巡に軽減され，適宜差し替えつつ12点ずつ公開された。これらのなかには『嬰児の食事』，『カルタ遊び』，『シャン＝ゼリゼ』とともにトレウェイによって撮影された『ロンドンの少女ダンサー』や『ハイド・パーク』も含まれる。当初ノヴェルティ劇場における興行予定は7月中旬の3日間のみであったが，連日長蛇をなす公衆の熱望に応えて，8月15日まで続行された。(9)

グラント・ロード界隈のノヴェルティ劇場はボンベイ市民に馴染みの深い会場であり，ここで初めて多数のインド人がリュミエール映画の真価に触れた。文化史的な意義の大きさでは外国人向けの初公開よりも，市井の劇場における興行が勝るとも言えよう。ただし，3段階に区別された料金も，インドの民衆にとっては相当に高価なものであった。トウェーンの記述によれば，現地で雇った従僕の給料は13ルピーにすぎず，一般の月給も鉄道の職員や邸宅の使用人は7ルピー，農場労働者に至ってはわずか4ルピーであった。(10)

リュミエール社の映写技師としてセスティエのボンベイ滞在は少なくとも5週間に及ぶ。しかし，インドで撮影された映写技師団のフィルムはひとつも現存せず，1905年までの製作を記載した同社の作品目録にも見当たらない。セスティエはさらにボンベイからオーストラリアへ旅路を続け，当地で『シドニー港の光景』や『メルボルン杯ダービー』等のフィルムを製作した。インドの風俗や民情が欧米人にはとりわけ特異なものに映ずることを考えると，インドの光景を収めたリュミエール映画が皆無である事実は大きな謎と言える。(11)

シネマトグラフへの熱狂を見た興行師たちは，一獲千金を狙って映写機やフィルムの入手に躍起となる。ボンベイでは1897年1月にスチュワートがゲイアティ劇場で映写機ヴィトグラフを披露し，9月にはヒューゲスが彼独自のモートフォースコープを公開する。1898年の末頃にはインド人と外国人の興行師数名が，野外のテントのもとに観客を集め，ノヴェルティ劇場やチボリ劇場での余興も勤めた。(12)

同じ時期に映画という新しい娯楽に着目して，多くの奇術師や興行師が巡業を始め，中国，インドシナ，ビルマ，セイロン，さらにはオーストラリアやニュージーランドへと旅した。ボンベイに現れた人物としてはカルル・ヘルツとアンダーソン教授が知られ，両者とも自分の妻を独身に見せかけて，奇術の相棒を勤めさせていた。『タイムズ・オブ・インディア』の広報によれば，アンダーソンと同伴者ブランシュ嬢は1897年6月に来たあと，翌年12月に再度滞在した。12月の公演は17日からチボリ劇場で開始され，自身の発明であるアンダーソノスコポグラフの真価を示したと言われる。上映されたフィルムには，ボンベイ駅へ列車が到着した映像と，プーナ競馬州長官賞レースでのスタートからゴールに至る映像が含まれていた。こうした試みは外国人の手によるものの，インドにおける最初の撮影として評価できる。(13)

II　インドにおける映画製作の黎明

1600年に設立されたイギリス東インド会社はベンガル地方の低湿地カルカッタに本拠地を置き，強固な要塞に多数のインド人傭兵を配備していた。プラッシーの戦いでベンガル土侯を敗走させた1757年から，デリーに遷都する1911年まで，カルカッタは英領インドの首都であり，インド総督府の所在地であった。そこでは現地人への英語教育が重視され，数多のベンガル人が下級官吏に採用されるとともに，植民地支配に抵抗し，民族の自立を求める機運も醸成されていく。1821年インド人によって最初のベンガル語新聞が発刊され，十九世紀後半にはインド・ルネサンスが開化した。1883年には参政権を要求する全インド国民協議会がカルカッタに結集し，1885年ボンベイで誕生したインド国民会議とともに，民族独立の運動を盛り上げていく。(14)民族の文化的伝統を継承しながら，こうした改革運動に深く係わった文学者ラビンドラナート・タゴールは，1906年に同胞への励ましをつぎのように歌った。

恥じるな，恥じるな，おお，バーラタの民(たみ)らよ。
権力と傲慢を笠にきて，贅沢三昧
富を誇る　あの西洋の商人(あきんど)たちの目の前で
白い粗末な衣服をまとい，平和な静かな面(おも)ざしで
質素な生活(くらし)をいとなむのを。

彼らの言葉に耳を傾けるな
おまえの心に持ちつづけよ。
それをおまえの家にたくわえるがいい。
おまえの気高い額(ひたい)に　目に見えない冠として
かざるがいい。大きく見えるもの，
見た目にうず高く積みあげられたもの
そのようなものにゆめゆめ圧倒されてはならない。
屈服してはならない，おまえの自由な魂(こころ)を
貧しさの王座につかせ　あがめよ！
困窮の余裕(ゆとり)で心をみたしながら。(15)

ボンベイにおけるシネマトグラフ初公開に6ヵ月遅れて，カルカッタでは1896年12月ステファン教授によって疾走する騎馬や列車の映像が公開された。(16)また，同地で発行された『アムリタ・バザール・パトリカ』1897年9月30日号は，10月2日から市内のスター劇場でステファンによってビオスコープが公開されると告知している。アメリカ出身の実業家チャールス・アーバンは，ロンドンに渡って貿易会社とウィーク

リー社を創設し，映写機ビオスコープの販売で評判を高めていた。また，当日フィルムが上映された舞台は，ベンガルの著名な俳優ギリッシュ・チャンドラ・ゴーシュもしばしば公演した場所である。スター劇場でも動く画像に市民の人気は沸騰し，同年10月29日から翌年1月22日までの37日間，かならずビオスコープの映写をプログラムに組み入れた。以後カルカッタではインド人の上流階級や知識人層のなかに，映画愛好の伝統が培われる。(17)

ステファンの興行に感嘆したベンガルの青年ヒララル・センは，輸入された一台の映写機と多数のフィルムを購入し，アマール・ダット古典劇場で『ロンドン生活の活画』，『女王即位60周年記念行進』，『グラッドストーン卿の葬儀』などを見せた。また彼は上流の市民に向けて会員制の映写会を企画し，首都の近郊でもこれが流行となる。富裕な実業家ジャムセティ・フラムジ・マダンも新しい大衆娯楽に注目し，1902年にパテ社から数台の映写機を買って，カルカッタ市内の要所にテント小屋を設けた。意欲的なパルシー教徒マダンは最初の劇場チェーン，エルフィンストーン映画殿堂を設立し，インド，ビルマ，セイロンに製作と配給の組織網を拡げるに至った。(18)

こうして都市のさまざまな会場でフィルムが上映される一方，農村部の町や村では映写技師の巡業が始まった。ガルガ著『かくも多くのシネマを！—インドにおける映画』の一文は巡業の有様を彷彿とさせる。

> 初期の巡回興行師のひとりはアブドラリ・エソファリ（1884~1957）であって，1901年にはアジアの一国からほかの国へと巡業し，数十万の人々に映画を認識させた。彼の旅行用品には，一台の映写機，数個のフィルム缶，折畳み式のスクリーンとテントが含まれる。音楽でショーを引き立てるには，地元の楽団を雇った。用意したテントは千人を収容できるほど巨大であって，座席からスクリーンまでの距離に応じて観客は料金を払った。個々の作品は100フィートから200フィートの長さで，アブドラリが1フィートにつき即金6ペンスで買ったものである。40本から50本のフィルムによってコメディ，オペラ，旅行記録，スポーツ競技など多彩なプログラムを提供した。1908年から第一次世界大戦の勃発までにアブドラリの巡回映画は，インドのほとんどの地域に浸透した。1914年にアルドシル・イラニーとの共同経営に入り，ボンベイのアレクサンダー劇場を引き受けた。(この共同経営は以後40年以上続く。)その4年後アブドラリはマジェステック劇場を設立し，1931年にはインド最初のトーキー『世界の美』がこの映画館で封切られる。(19)

肖像写真の専門家ハリスシャンドラ・S・ブハートヴァデカルは1897年にボンベイのハンギング公園でレスリングの試合と猿の悪戯を撮影した。このふたつはやがてテント映画館ブハートヴァデカルで上映される。4年後に彼は数学者ラグフナスの帰朝歓迎会をフィルムに収めた。こうしたブハートヴァデカルの試みは，インド人自身による映画製作の嚆矢と考えられる。また，1903年に国王エドワード七世が即位し，デリーの王宮で盛儀が挙行されると，それをドキュメンタリーとしてまとめた。イギリス統治者が企画したこの祝賀は，搾取と抑圧に対するインド人の反感を募らせ，とりわけベンガル地方において抵抗運動を激化させる。(20)

フランスの有力な映画会社パテは1900年前後からカルカッタに社員を派遣し，インドでの撮影を開始した。興行師として成功を収めたセルは，映画製作にも意欲を抱き，パテ社の事業に参加する。市内の各所で彼は水浴や闘鶏の様子を撮り，整髪剤の宣伝フィルムも作った。さらにセルはクラシック劇場におけるベンガル演劇の公演を撮影し，しばしば幕間に上映した。これらの映像には『アリババ』，『ドール・リラ』，『シターラム』の名場面やアマール・ドゥッタ，ギリッシュ・グホーシュなど著名な俳優の演技が記録されている。(21)

リュミエール映写技師団の幹部であったフェリックス・メスギッシュは，1903年アーバン貿易会社の要員としてトルコなど近東諸国に派遣された。その後同社で知り合ったロジャースとエクリプス・フィルム＝ラジオ会社を設立し，映画『世界周遊』の製作に着手する。1910年12月彼はコロンボからマドラスに着き，デリー，アグラ，ベナレス，バローダ，チベットなどで撮影を重ねた。異国情緒と観光的な魅力を求める彼であったが，カルカッタでは植民地インドの弊害と矛盾を痛感する。メスギッシュ著『世界映写旅行—映像の狩人の回想』から首都滞在の一節を引用する。

> クリスマス・イヴにカルカッタに着いた。灰色に霞んだ平坦なインドの首都であって，新市街はヨーロッパの醜い混成にすぎず，そのうえ息苦しい大気に包まれている。個性のない現代都市の様相を呈し，一律な建築様式はアメリカの都会に倣っている。
>
> 翌朝イギリス租界の商店は閉ざしたままである。教会の入口とショウリングへ一遊歩道では植民地の上流階級を気取る輩が，ヨーロッパ風の服装を誇示している。対照的に彼らの背後には現地人の従僕が沢山控えて，不動の姿勢を保っている。［中略］
>
> インド政庁へ挨拶に行けば，藩王グライボールの口利きが得られる。強硬な私の主張にかなり抗弁したあと，フランス領事はペシャヴァールの軍事司令官宛の手紙を交付してくれた。実際にはアフガニスタンとの国境まで行きたいのだが，その

企画は諦めるように，とわが社の代理人が必死で止める。国境付近は不穏な情勢にあって危険であり，撮影も禁止されて，行っても無駄だと言う。このような障害を知らされると，そこまで進みたい気持がますます強くなる。

出発に備えながら，ホテルの空室に簡単な機器を据え，ネガ・フィルムの現像にかかった。これらはインドにおける最初の成果であり，パリへ発送する予定のものである。[中略]

ヨーロッパと同じく夕刊売りが路上で叫ぶ。衝撃的な報道を知らせてくれた。チベットで暴動が勃発し，仏教の最高指導者ダライ・ラマが側近や侍従や僧侶とともに逃亡したのである。インドへの道を彼らは辿っている。チベット高原を越えて，ダルゲーリングに避難するであろう。

シネマのことを考えて，状況を知るのに私は躍起となった。(22)

イギリスの実業家アーバンは映像に色彩を施す技術キネマカラーを発明し，メスギッシュに続いて1911年にインドを訪れた。国王エドワード七世が在位7年で歿し，新たな首都デリーで即位の式典が行われるからである。民族意識の高まりとともに暴動の発生が噂される一方，アーバンは自己の発明が盗用されることを怖れていた。しかし，デリー王宮での盛儀が映像に収められ，帰国した彼に7千500ドルの収益をもたらした。こうした外国人のフィルム製作がインドの人々を大いに刺激したことは言うまでもない。(23)

インド映画の父と仰がれるダーダサーヘブ・ファルーケは1870年にボンベイ近郊ナシクで生まれた。古代の洞窟寺院をとどめるこの地はヒンズー教の聖地とされ，彼の父親も有名な学僧であった。慣習どうり当然息子も僧職に就くはずであったが，幼時から絵画や演劇や奇術に強い興味を示した。やがて父親がウィルソン・カレッジのサンスクリット語教授としてボンベイへ転居し，ファルーケはサー・ジェイ・ジェイ芸術学校，つぎにはバローダのカラ・ブハーバン学園に入った。こうして建築と塑造の講義を受けながら，奇術を覚え，演劇にも参加する。1890年にはカメラを入手して，写真にも凝り始めた。卒業後印刷や出版の業務にも手を染めるが，生涯の目標をなお模索し続けた。40歳に達した1910年の歳末，彼はボンベイでひとつの映画作品に接し，霊感に打たれたかのごとく天職を自覚する。妻サラスバティバイが回想するように，ファルーケはただちに翌日彼女を伴って再度同じ映画館に入った。(24)

私たちふたりはサンドフルスト・ロードの照明テント〈映画館〉へ行きました。そこでは一座の公演が行われ，アメリカ・インド・シネマトグラフと名乗っていたのです。一等の料金は8アナーでした。それは1911年[ママ]のクリスマスでキリスト教徒とヨーロッパ人で会場は一杯でした。灯りが消されると，スクリーンに動く雄鶏の画像が現れました。パテ社の商標です。ついでフールスヘッドという男優を主演にしたコメディが始まりました。フィルムが終わるたびに点灯がなされ，奇術や曲芸が舞台で行われます。当日の主要な映画は『キリストの生涯』でした。キリストの苦難と磔刑を見て，観衆は泣きました。そのフィルムはシネマカラーという工程で色彩が施されていました。家に帰りながらファルーケは言いました。「『キリストの生涯』を手本にすれば，自分たちにもラーマとクリスナの映画を作ることができる。」これを聞いて私はとても喜べず，黙り込んでいました。(25)

以後2ヵ月にわたってファルーケは市内で公開させるすべてのフィルムを熟視し，映画技法に関する多くの文献を読破した。生命保険の証書を抵当にして旧友よりローンを受け，映写機器の購入と撮影技術の習得を願って1912年1月ロンドンに渡航する。イギリスでは関係業者の尊大な対応に疲れ果て，『ウイークリー・バイオスコープ』の編集長カプルヌからも競争の激しさを説かれ，翻意を促された。しかし，ファルーケの異常な決意と誠実な人柄に惹かれ，編集長はセシルシル・ヘップワースに紹介した。かってアーバンのウォーリク社に勤めたヘップワースは，1997年にシネマトグラフの概論書を刊行し，1903年大作『不思議な国のアリス』の製作で大成功を収めた。彼によって設立されたウォートン・オン・テイムズ撮影所は，当時のイギリスで最良の設備を備えたスタジオと言われる。この撮影所でファルーケは一週間にわたってトリック映像の秘訣を学び，みずからも試作して自信を深めた。だが，ウィリアムソン・カメラを携えて帰国した彼にもはや抵当に入れる財産はなかった。この窮状にあって妻のサラスバティバイは映画製作の夢を叶えるため，宝石類を売却する。こうした経費の問題とともに劇映画製作に対するいまひとつの障害は，女性を抑圧するインドの慣習が女優の育成を困難にしたことである。(26)アメリカ人研究者エリック・バルヌーヴとインド人研究者S・クリスシュナスバミイの共著『インド映画』には，ファルーケ自身へのインタヴューに基づいて『ハリシュチャンドラ王』の製作過程がつぎのように叙述される。

インドの演劇と舞踊がその地位を失墜し，卑賤とされる階層の所業，娼婦の仕事とみなされていた。芸能と売春の繋がりが密接なあまり，売春の撲滅する方途としてインドの演劇，舞踊，音楽を一掃することすらときには主張された。新しい演劇の伝統は，元来ヨーロッパから鼓吹されたものであり，カルカッタや少数の都市で徐々に広がってはいたが，特権的な集団の範囲を越えなかった。

映画への出演など堅気の女性は到底考えまい，とこうした状況がファルーケを苦慮させた。そのように尋ねることすらできない，と彼は感じた。数人の娼婦にも打診しても，企画を受け入れる女はいない。スクリーンに姿を現すことは，公然と烙印を押されることだ，とファルーケの願いを彼女らは解した。別の打開策を見出すしかなかった。

あるレストランでファルーケは，若い男が働いているのを見かけた。ほっそりした体格と四肢のコックである。彼に月給はいくらかと質問する。10ルピーと応える。自分の映画に出れば，15ルピー与える，とファルーケは申し出た。こうして若い男，A・サルンクが企画に加わり，ヒロインのタラマリを演じた。のちにファルーケが製作した作品，神話『ラーマーヤナ』の一部を映画化した『ランカ炎上』では，サルンクがヒーローとヒロインの両者に扮した。一方では美しいシッタとなって，ランカ島で10の頭を持つ怪物ラヴァナの虜となり，他方では本土のラーマとなって，人と猿の侵略連合軍を組織する。この映画はもっとも成功したファルーケの作品となり，疑いもなくサルンクをインド映画において最高の人気を有する男優兼女優にしたのである。[27]

ファルーケの処女作『ハリシュチャンドラ王』は，3700フィートの長編であり，インドの神話『マハーバラータ』に題材を採っている。主人公であるハリシュチャンドラ王は，責務と真理に忠実であるため，みずからの王国も妻子も放棄する。しかし，その真摯な生き方に感銘を受けた神々が，最後には彼を以前のかっての栄光の座に連れ戻す。古来インドではこうした神話が歌や踊りを交えて演じられ，言語の相違を超えて共通の文化遺産となっていた。神々，奇蹟，武勲，悪鬼，魔術を鏤めた叙事詩は，映画的なトリックを駆使し，一般大衆を惹きつけるのに絶好の素材と言える。『ハリシュチャンドラ王』は1913年5月にボンベイのコロネイション劇場で封切られ，絶讃を浴びて3週間継続された。[28]下記の論評抜粋は同月5日付の新聞『ボンベイ・クロニカル』に記載されたものである。

インド神話を映画化する可能性は絶大である。そして，こうした方向に進む最初の試みがなされるまでに，ながい歳月を要したことが奇妙に思われる。・・・ハリシュチャンドラ王の物語はもっとも感動的なドラマのひとつである。・・・ファルーケはきわめて難しい場面をも美事表現することに成功し，人々はこの作品の美しさと巧みさを惜しみなく称讃した。国王と王妃が絶望しつつ抱擁する場面，燃えさかる大地に王妃がわが子を運び，火葬する場面以上に劇的な感動を与えることは，いかなる無言劇でもありえないと思われる。・・・炎上する森の光景，時宜を得た神シバの出現，シバによる死せる少年の蘇生等における卓絶した効果に注目すべきであろう。[29]

『ハリシュチャンドラ王』の成功によってファルーケは多大の収入を獲得し，風光に恵まれた故郷ノシークにスタジオを移した。この地で1913年夏から第二作『ブハスマスール伝説』が着手され，初めてふたりの女性，ゴクハール夫人とその娘が演技陣に加わった。以後25年間に彼が製作した作品は，短編やドキュメンタリーを含め，100本あまりに及ぶ。1917年に完成した『ランカ・ダーハム』の公開に際しては，午前7時から深夜まで毎時間上映したと伝えられる。また，その翌年マドラスにおける『カリスマ・ヤナム』の封切りでは，劇場前の大道に人波が溢れ，交通が遮断された。これらの劇映画は20年以上にわたって上映され，ビルマ，シンガポール，東アフリカでも好評を博した。[30]

ノシークに建設されたファルーケの広大なスタジオには，図書室や動物園とともに，乗馬，フェンシング，ボデイビルの施設があった。その敷地には彼の統率のもとに大半の俳優や技師が居住した。しかし，1931年にイラニーがインド最初のトーキー映画『世界の美』を製作し，観衆の興味に大きな変化が生じた。資金調達の困難がファルーケの健康を悪化させ，1934年に公開された彼唯一のトーキー『大洋に架かる橋』は悲惨な興行結果に終わる。世間から忘却されたファルーケは1944年2月貧窮のうちに逝去した。[31]

インドの映画史家はノファルーケの生涯と事業をヨーロッパにおけるメリエスの功績に喩えている。種々の技芸や職業を経験し，中年になって映画製作を始めたこと，豊かな想像力に恵まれ，独創的なトリックを駆使したこと，トーキー時代の到来によって活躍の場を失ったことである。しかし，欧米の映画製作がリュミエールとメリエスの事業を源泉とするように，やがてインドではファルーケの豊饒な遺産を基盤としてハリウッドに比肩する一大シネマ王国が築かれる。[32]

註

筆者が参照した主要な書物は，本稿では下記の略号で示される。(原則として略号の大文字は著者名の頭文字を，小文字は書名の頭文字を示す。)

BKi: Erik BARNOUW & S. KRISHNASWAMY, *Indian Film,* New York, Columbia University Press, 1963.

DMb: Sharadala DWIVEDI & Rahul MEHROTRA, *Bombay, The Cities Within,* Bombay, India Book House PVT, 1995.

Gs : B D GARGA, *So many Cinemas, The Motion Picture in India,* Mumbai, Eminence Designs Pvt., 1996.

Mt : Felix MESGUICH, *Tours de manivelle, Souvenirs d'un chasseur d'images,* Paris, Grasset, 1933.

Pci : Jean-Loup PASSEK, *Le Cinema indien,* Paris, Centre Georges Pompidou, 1983.

Rbc : Kironmoy RAHA, *Bengali Cinema,* Calcutta, Nandan,

1991.

Tf : Mark TWAIN, Rollowing the Equator: A Journey around the world. II in *The Writings of Mark Twain*, New York, Gabriel Wells, 1923. Volume XXI.

マア：松岡環著『アジア・映画の都　香港～インド・ムービーロード』めこん，1997年。

(1) *Tf*, pp. 13-14.

(2) 中村平治著『南アジア現代史Ⅰインド』山川出版社，1993年。pp. 38-40. *DMb*, pp. 51, 124

(3) *DMb*, pp. 144-145.

(4) *DMb*, pp. 145-146.

(5) Michel AUBERT et Jean-Claude SEGUIN, *La Production cinématographique des frères Lumières*, Paris, Editions Mémoires de cinéma, 1996. p. 413.

(6) *The Times of India*, 7 July 1896. quoted in *Gs*, 1996. p. 10.

(7) *The Bombay Gazette*, 9 July, 1896. quoted in *Gf*, p. 11.

(8) *Tf*, pp. 16-17.

(9) *The Times of India*. July 11, 1896. *Gs*, p. 11.

(10) *Pci*, p. 13. *Tf*, p. 27.

(11) オーストラリアにおけるセスティエの興行についてはつぎの文献が参考になる。

Claudine THORIDNET, *Le Cinema australien*, Paris, Centre Georges Pompidou, 1991. p. 55. *Tf*, pp. 27.

(12) *Gs*, pp. 11-12.

(13) *Gs*,. p. 12.

(14) ジャワハルラ・ネルー著，辻直四郎ほか訳『インドの発見』岩波書店。1956年。下巻。pp. 407-408, 473-475.

森本達雄『インド独立史』岩波書店，1972。pp. 60-71, 78-80.

(15) ラビンドラナート・タゴール，森本達雄訳「恥じるな，恥じるな・・・」『タゴール著作集』第三文明社，1981年。第1巻，pp. 565-566.

(16) *Rbc*, pp. 1-2

(17) *Gs*, p. 12.

(18) *Gs*, p. 13.

(19) *Rbc*, p. 13.

(20) *Gs*, pp. 13-14.

(21) *Gs*, pp. 14.

(22) *Mt*, pp. 179-181.

(23) *Gs*, pp. 16-17.

(24) *Gs*, pp. 18.

(25) Saraswatibai PHALKE, Phalke Centenary. quoted in *Gs*, p. 19.

(26) *Gs*, pp. 18-19.

(27) *BKi*, pp. 13-14.

(28) *Gs*, p. 20. *Pci*, p. 35.

インド映画史の研究者松岡環はこの作品についてつぎのような讃辞を綴っている。

「ファルーケーが映画人として優れた才能を持っていたことは，現在ごく一部しか残っていない『ハリシュチャンドラ王』を見ただけでもわかる。セット撮影だけでなく野外ロケも使ったこの映画は，処女作というのに映画的楽しさに満ち溢れている。おまけにファルーケーは，この作品を撮りながらメイキングもののドキュメンタリー映画『映画はいかにして作られるか』も残しているのだ。衣装部屋での衣装合わせ風景，野外ロケで汗をふきふき演技をつけるファルーケーの姿など，当時の貴重な記録映像が残されている。自分が映画の歴史の重要な1ページを作っているのだ，と強く自覚していたから，といわれているが，映画の申し子のようなこんな人を産みの親に持ったインド映画は，実に幸福なスタートを切ったと言える。」（マア，p. 98）

なお，松岡のいくつかの著述を除けば，インドの初期映画史に関する邦語文献は皆無に近い。また，定評あるサドゥール著『映画全史』やデラント著『比較映画史』でもインドにおける映画製作は探究の射程に入っていない。

(29) *The Bombay Chronicle*, 5 May 1913. quoted *in Gs*, p. 20.

(30) *Gs*, pp. 21-22.

(31) *Gs*, p. 23. *Pci*, p. 35.

(32) *Gs*, p. 13, 23. *Pci*, pp. 34, 36.

（平成10年9月11日受理）

インドにおけるシネマトグラフ初公開

The Times of India.

VOL. LVIII. NEW SERIES. BOMBAY: WEDNESDAY, JULY 15, 1896. NO. 16[illegible]

THE MARVEL OF THE CENTURY.
THE WONDER OF THE WORLD.
LIVING PHOTOGRAPHIC PICTURES.
LIFE-SIZED REPRODUCTIONS
BY
Messrs. LUMIERE BROTHERS.
CINEMATOGRAPHE.
FEW EXHIBITIONS WILL BE GIVEN
At
WATSON'S HOTEL
TONIGHT ENTIRE CHANGE.
PROGRAMME will be as under:
1. Baby's Dinner.
2. Rejoicing in the Market Places, Paris.
3. Street Dancers of London.
4. The Diver.
5. Turning the Soup-plate by Trewey.
6. A Mad Cap Card.
The Entertainment will take place at 7, 9, and 10 p.m.
ADMISSION ONE RUPEE.

NOVELTY THEATRE.
FOR THREE DAYS ONLY.
TUESDAY, THURSDAY, and FRIDAY,
July 14th, 16th, and 17th.
TWO EXHIBITIONS EACH EVENING at [illegible] and 9-30.
WITH CHANGE OF PROGRAMME.
MESSRS. LUMIERE BROTHERS
CINEMATOGRAPHE.
THE MARVEL OF THE CENTURY!
THE WONDER OF THE WORLD!!
ANIMATED PHOTOGRAPHIC PICTURES.
LIFE-SIZE REPRODUCTIONS.
Twelve Pictures at each Exhibition.
Orchestra Stall and Dress Circle, Re. 2
Second Seats, Re. 1.
Back Seats, Eight Annas.
Plan at SOUNDYA & Co.

図版 1

ボンベイ市マハトマ・ガンジー通りのワトソンズ・ホテル。1896年７月７日アジアにおけるシネマトグラフ初公開はこの建物で行なわれた。130年間の風雨に晒されて荒廃の様相を呈してはいるが，同じ施設が現在も店舗や事務所として使用されている。

（1998年３月に撮影）

図版 3

1996年７月11日付の日刊新聞『タイムズ・オブ・インディア』。ワトソンズ・ホテルにおける当日のプログラムとともにノヴェリティ劇場での興行予定も告知されている。

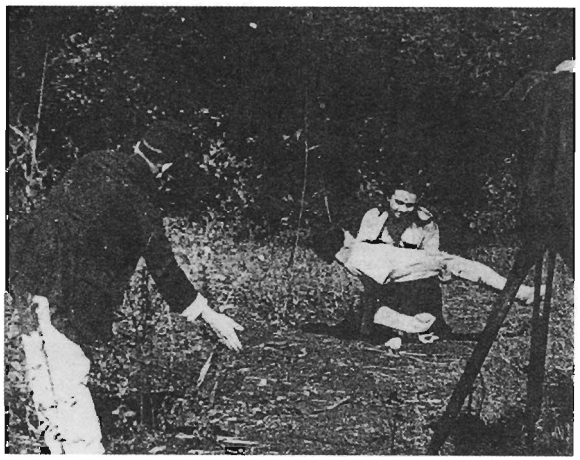
図版 2

シネマトグラフ初公開を記念するプレート。
旧ワトソンズ・ホテルの正面柱廊に掲げられている。

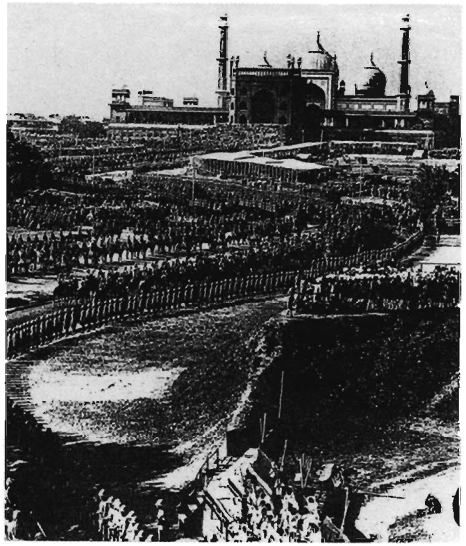
インドにおける初期の映画製作

図版 4
劇映画『ハリチャンドラ王（1913年監督ファールケ）』の一場面。水浴する女性を男優サルンクが演じている。

図版 5
第二作『ブハスマール』の撮影を行なうファールケ。インド映画の女優第一号としてゴクハール夫人が指導を受けている。



図版 6
ジョージ五世の即位祝賀式典。1911年イギリスから出張したアーバンがデリー王宮において製作した。



出　典

図版 4：Jean-Loup PASSEK, *Le Cinéma indien,* Paris, Centre Georges Pompidou, 1983. p. 34.
図版 5：B D GARGA, *So many Cinemas, The Motion Picture in India,* Munbai, Eminence Designs Pvt., 1996. p. 21.
図版 6：*ibid.,* p. 17.